























往還の松

加賀藩では、慶長六年（一六〇一）、徳川幕府の全国的な施策に呼応して北陸道に松並木を植樹した。このような松は「往還の松」と呼ばれたが、道行く人々に木陰を与え、また冬の深雪時には吹雪で道を踏み誤らせることもなくおおいに道中の助けとなった。

その植樹の方法は、二間に一株の割合で、一里の間に片側八三〇株の割合によって植えられ、また、道路の清掃や修理など道の管理のため道番人がおかれた。

街道はよく整備され、並木の植樹による街道風景は限りなく美しいものであったという。

当時の往還の松は、高岡市には残っていない。そこで、本市で実施してきた「高岡歴史の道を歩く会」での学習活動を基にして、北陸道が通っていたこの地に松の木を植樹した。

往還の松を再現することにより、人々とともに生き続けた往還の存在を永く後世に伝えようとするものである。

平成十年七月

高岡市教育委員会







旧北陸道の往還松跡

「慶長六年令モチ松ヲ往還ニ植エシム。

往還トハ官道ヲ曰フ。

往還ノ行樹此ニ始マル。」『加賀藩民事志』

慶長六年(1601)、加賀藩は街道沿いに往還松を植える命令を出しました。寛永七(八年(1630(31)や文久年間(1861(63)にも植樹した記録があり、往還松は江戸時代を通じて地域の景観を醸成する役割を担ってきました。二間(約3・6m)に一株、一里(約4km)に片側八三〇株の間隔で行った植栽記録から、参勤交代の折、松が立ち並ぶ街道を進む加賀藩主一行の姿が想像されます。数十年前までは大野地区でも五、六十本残っていました。台風・落雷などにより次々に姿を消しました。先年、町内最後の一本もついに枯れ、平成十五年四月、惜しまれながら伐採されました。地区の移り変わりを見守り続けた往還松は、此



の風景に欠かすことができません。史実に基づき新たな松を植えることで、次世代にこの景色を伝えていきたいものです。

・旧市教育委員会



